

# 医世云歌壇



## 山の空気

青森 秋 霧 朝 光

生きるとは諦め多きことなるか荒ぶ岬に浜菊の咲く

草木も花開くため陽の光奪ひ合ふとぞ生きる酷薄

ゆくりなく開く聖書のサムエル記インク混じりのわが死紋

雄鶏の衿持といわん雌鳥に虫をゆずりて鶏冠ひらかす

ゆつくりと登りゆくとき一歩ずつ山の空気に溶けゆくわれか

## フランス一周

千葉 蒲 谷 玲 子

ボンデュガール ロマ時代の橋今も超然としてあめつちに立つ

白黒映画「港のマリー」観し記憶マルセイユは唯に陽気な港

水源地エビアンの水ぶくみつゝ山青く水清きくにを恋ひしむ

ポルドーのぶどう農園の豊富な女よ汝れはロゼの香がする

エトルタの奇岩に続く浜に下り寄せ来る波に小石を選ぶ

二〇〇九年

東京 小松 安彦

山茶花の垣根に沿ひて一輪車練習してゐる二人の少女

今日からは昭和生れの少年と少女はゐない一月八日

紅梅と雲のあはひに半月と金星仰ぐ立春の宵

年末に買ひしピンクのシクラメン三月尽の今日も咲き継ぐ

創立は百年前の小学校今年の春も桜はぶぶく

## 泣き虫の歌

神奈川 助川 信彦

三つ上の兄あり吾を泣き虫と嗤ひつつ相撲の相手させき

冬の夕べに愚図りぬし吾を父が捉へ玄関より外へ出だし鍵閉む

夕星の下にて咽ぶ吾を呼ぶは母の声なり厨戸開く

厨にて独りの遅き夕食を摂りきおかすは真鱈にして

幼稚園は元来嫌ひお遊戯が苦手歯痛を訴へて泣く

## 春の訪れ

神奈川 武井 忠夫

子らを診んと向かう軒端の紅梅の雨上がりたる朝の華やぎ

ほの紅き枝だれ馬酔木の花房のたわなに咲けり築山の間

溢るかに馬酔木花房さわに群れ春の息吹き庭先に充つ

ユキヤナギに花びら充ちてつちなびきさゆらぐ春となりけるかも

朱と黄の彩り著るぎ筒花の“チロリアンランプ”のお伽めく花

記憶残滓部分

東京 田村豊幸

古里の写真手帖にはりつけて鞆に入れて持ち歩くかな  
夜中二時フトなに故に目が覚めて薬師如来の事思ひ出すかな  
河原鶉とロヒロと啼く鍛冶屋の樹あの少年の頃父母も居たのに  
平磯の浜辺に祖父に連れられて牡蛎食べし事なぜか想えり  
下妻の中彦眞服母の家 家は消えても風呂敷残る

白帆の湯

茨城 羽生藤伍

富士山と筑波の嶺を觀つつ入る湖畔に湧きしわが白帆の湯  
白帆の湯と二三階のビル建ちて見下ろすわが町更に美し  
春采たりさ庭の池に水射せば緋鯉金魚ら群がり浮ぶ  
散歩路の滝は私のナイアガラ取水堰より広く溢れて  
鶯が喰い残したる餌台の果物雀ら仲良く啄む

チヨコレート

東京 林 宏匡

春一番吹きて届きしチヨコレート君の優しき心寄せ来つ  
チヨコレートとつりて舌に溶けゆきて若かりし日の夢なかに入る  
ハート形のチヨコを味はぶわが心老を忘れて過くすひととき  
チヨコレート味はひてゐる人の世の儂きこともこしへとして  
チヨコレートとだはりてゐるわが心バレンタインの日は恵みの日

古里の春

東京 初芝澄雄

バスを下り里に向いし門辺り梅は早くも花開きいる  
陽光に輝やく庭の門辺り紅白の梅賑やかに咲き  
中空に明星光る候となり古里の空に富士を望みぬ  
牛込の城門跡の石組や神楽の坂は眞直ぐに伸び  
市谷の近くに知りし富見坂ビルの谷間に長く続けり

春のおとずれ

東京 藤井淳子

夜が明けて呼吸をすれば風がきて歌の言葉教えてくれる  
青春の想ひ出の曲を楽しみて時には一人でレコードを聴けり  
樹をはなれ土に散りゆくひととせの木の葉の色のさまさまの朝  
次の世も女として生れたしと仰げばやさし春のおとずれ  
明日といふ未知なるものの嬉しさを心の裡に静かに置かむ

回想のジエームス・ディーン

神奈川 布施徳郎

白石の煉瓦棟消えし故郷の坂より見ゆる町の寂しさ  
太つちの君よ故郷に老いつぎぬ「シンガー・ミンシン」の看板褪せて  
街に会ふ新なるサージDAKの中学生スフ国防色のわれ思ひ出す  
上映のジエームス・ディーンを町々に追ひし遠き日友は語りぬ  
「小父さんあのパン取って」呼ぶ老婆声かけらるる我も高齢

ハソイ

東京 横田 英夫

オートバイ一団となりて走り過ぐサバンナ駈ける「ヌー」の如くに  
縦横にオートバイ走る交叉点引かれし水牛悠々と行く  
ホーチミン廟小雨に濡れて黙々と入場を待つ長き行列  
靈廟の冷たき階を降り行けば遺体置かれあり静寂の中  
擬然と四人の兵士立ちて居り遺体守りて見揺るぎもせず

狂歌

大黒 勇

無理強ひに生かされてゐる本人は如何なる心のありさまなりや  
安樂死認めぬ人はあゝ無情長く生かして苦しめる氣なり  
かくすればかくするものと知りながらちよこ敵はる煙草のみの肺  
脚煙者ちめんとくともちめられず身は煙末は煙になるとも  
診療の報酬削りて置きたがら産科旧科醫の不足に嘆む

振り文

大黒 勇

いましめの鏡の池よ山鳥の、影に愛<sup>めで</sup>でつつ色に溺るな、かく詠  
出せし一歌は、是の草紙の大意にして、張華が博物誌に據れ  
るなり。足引の山鳥は、その美き毛に愛で、水に映して終日得  
去らず、心惚目眩<sup>ほれ</sup>きて、竟に溺死するとなん、男女の相歡<sup>こいあひ</sup>  
びて、彼鼻骸を抱きて得去らず、家を亡し身を喪ふも、亦これ  
と同じかるべし。

機亭琴魚

たつひつあをとのいしがみらんすいしんこ  
刀筆青砥石文鸞水箴語

いましめの川の流よ片足の、分に過ぎたる事に溺るな、かく詠  
出せし一歌は、是の物語の大意にして、京鹿子が自作に係る  
なり、足引の山田の案山子は、その動かざるに飽きて、歩き回  
りて終日戻らず、疲労仆れて、竟に斃死するとなん、人の飽き  
て、其勤務を去り、家を亡し身を喪ふも、亦これと同じかるべ  
し。